

石川県かほく市余地経塚出土の珠洲焼について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MATSUNAGA Atsushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002000656

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



石川県かほく市余地経塚出土の珠洲焼について

Suzu Ware unearthed from the Yochi Sutra Mound in Kahoku City,
Ishikawa Prefecture

松永 篤知

MATSUNAGA Atsushi

金沢大学 資料館 特任助教

Assistant Professor, Kanazawa University Museum

Abstract

There are various archaeological materials in the collection of Kanazawa University Museum. All of them are valuable materials, but their complete picture is still being sorted out and investigated.

This paper focuses on the Suzu ware unearthed from the Yochi Sutra Mound in Kahoku City, Ishikawa Prefecture. It was collected by the Hokuriku Anthropological Society, which was active during the Fourth Higher School, but has been stored in the underground storage room of the museum for a long time.

Although there are only two pieces of pottery (a jar and a bowl), they are very noteworthy as an ancient pottery material of early Suzu ware, as a spiritual culture material of the Medieval period, and as an academic material on the history of archaeology in Ishikawa Prefecture.

Therefore, the author observes and records these Suzu ware jar and bowl based on current archaeological findings and measurement techniques, while considering past reports and research, and presents detailed information and evaluation of them as museum material.

1. はじめに

金沢大学資料館（以下、資料館）には、実に様々な考古資料がある。「四高考古資料」、「井上鋭夫発掘資料」、「一乗谷朝倉氏遺跡出土資料」が代表的な資料群であるが（松永2018）、2022（令和4）年4月1日付で金沢大学埋蔵文化財調査センターが資料館に統合されたことにより、金沢大学構内遺跡出土資料（角間遺跡出土資料、宝町遺跡出土資料、鶴間遺跡出土資料、東兼六遺跡出土資料）も加わって、いまやその数は数十万点を超える状態である。いずれも貴重な資料であることは間違いないが、その全貌はいまだ整理・調査中である。

本稿で取り上げるのは、資料館所蔵考古資料の中でも、四高考古資料の2点で、石川県かほく市（旧宇ノ気町）余地経塚から出土したとされる珠洲焼の壺と鉢である（写真1）。両者とも完形で、知る人ぞ知る逸品であるが、長らく資料館の地下収蔵庫に収まったままになっており、筆者が整理・調査の過程で2023（令和5）年になって存在を確認した。わずか2点の焼き物であるが、珠洲焼の古陶資料としても、中世の精神文化資料としても、石川県の考古学の歩みに関する学史的資料としても、大いに注目すべきものである。そこで、過去の報文・研究も踏まえつつ、現在の考古学的知見と計測技術に基づいて当該資料を観察・記録し、詳細情報を提示するとともに、博物館資料としての評価をおこなう。



写真1 余地経塚出土珠洲焼（左：壺、右：鉢）

2. 余地経塚出土珠洲焼の背景

さて、資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼は、金沢大学の前身校である第四高等学校時代に活動していた北陸人類学会の収集品を軸とする四高考古資料（在田1996）に属する。壺・鉢ともに他の四高考古資料と共通する切手風の注記ラベルが器面に貼られていることから（写真2）、同時代の収集品であることは確実である。そして、注記ラベルには「加賀河北郡高松町余地」¹⁾と書かれており、現在のかほく市余地の出土品であることが読み取れる。そこで1923（大正12）年刊行の『石川縣史蹟名勝調査報告』第1輯（石川縣1923）を見ると、「63 飯川（2）及余地（1）発見土器」として、まさにこの壺に鉢をかぶせた状態で撮った写真が掲載されているのである。

さらに既刊書を追いかけていくと、壺の方は、吉岡康暢氏監修の『珠洲の名陶』（吉岡（監）1989）に写真付きで番号「84」・器種「叩壺」・出土地「河北郡高松町余地（経塚）」・保管者「金沢大学」とされている。また、同氏の大著『中世須恵器の研究』（吉岡1994）では、経塚名「余地」・所在地「河

北郡高松町余地・保管者「金沢大学」の須恵器系経外容器として、壺に「63-1」、鉢に「63-2」の番号が与えられ、それぞれ実測図（図1）と写真が示されている。

ここで、石川県の遺跡地図（いしかわ文化財ナビ²⁾）を見ると、図2に示した位置に余地経塚（管理番号813800）と余地横穴（管理番号813700）が南北に並んで存在している。横穴の約200m北に位置していた経塚が、資料館所蔵珠洲焼の出土地ということになる。ただ、この経塚と横穴の情報が、若干紛らわしいことになっている。

というのも、1901（明治34）年に刊行された『北陸人類学会志』第4編所収の「古鏡塚」（鳴門1901）に、「加賀國河北郡余地村某の邸後に一小丘ありけり 某去ぬる明治廿三年の春とかや開墾せはやとてその丘を掘崩せしか圖らすも摺鉢形に其大さなる祝部土器もて蓋へる大なる甕二ツ堀出せり（原文ママ）中に腐蝕せる古鏡七面朽ち折れたる劍二口ありけり」とあり、これを『宇ノ気町史』第二輯別巻（宇ノ気町史編纂委員会1991）では余地にあった古墳時代の横穴のうちの一つのこととして紹介しているのである。一般的に祝部土器とは須恵器のことであり、それに鏡と劍が伴っていたとなれば、古墳時代をイメージしたのであろう。古鏡塚の記述を、古墳時代の横穴情報として扱っている。しかし、この古鏡塚から出土した鏡は、『北陸人類学会志』の記述「菊唐草に尾長鳥の紋様あり これ鶺鴒ならん 丙には鶴の紋様あり 是等の古鏡に多く見ゆるものなり」および巻末図（図3）から古墳時代の銅鏡ではなく、平安時代以降の和鏡であることが明確であり、「祝部土器」というのも中世須恵器たる珠洲焼を指しているものと考えられる。これはまさに、経典を入れた経筒を蓋付きの陶製外容器に納め、さらなる副納品として鏡や劍を伴う埋納遺跡の経塚の姿を示している。吉岡康暢氏は、この『北陸人類学会志』の記載を正しく捉え、金沢大学にある珠洲焼壺・鉢を余地経塚出土品として著書に記しているのである。

このように、明治時代の「古鏡塚」に記された余地経塚の珠洲焼外容器というのが、現在の資料館所蔵珠洲焼の正体である。一緒に出土したという鏡や劍が現在どこにあるのか分からないが、もしかしたら今も金沢大学のどこかに眠っているのかもしれない³⁾。



写真2 余地経塚出土珠洲焼の注記ラベル（上：壺、下：鉢）

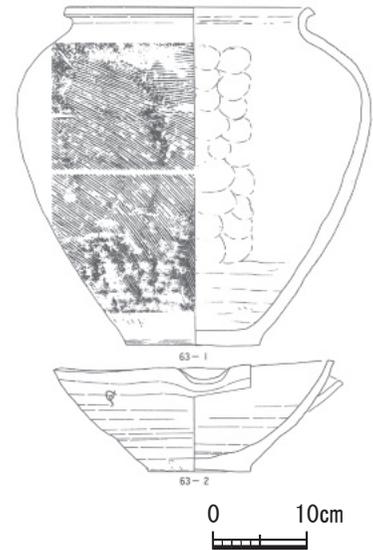


図1 『中世須恵器の研究』（吉岡1994）掲載の余地経塚出土珠洲焼の実測図（上：壺、下：鉢）

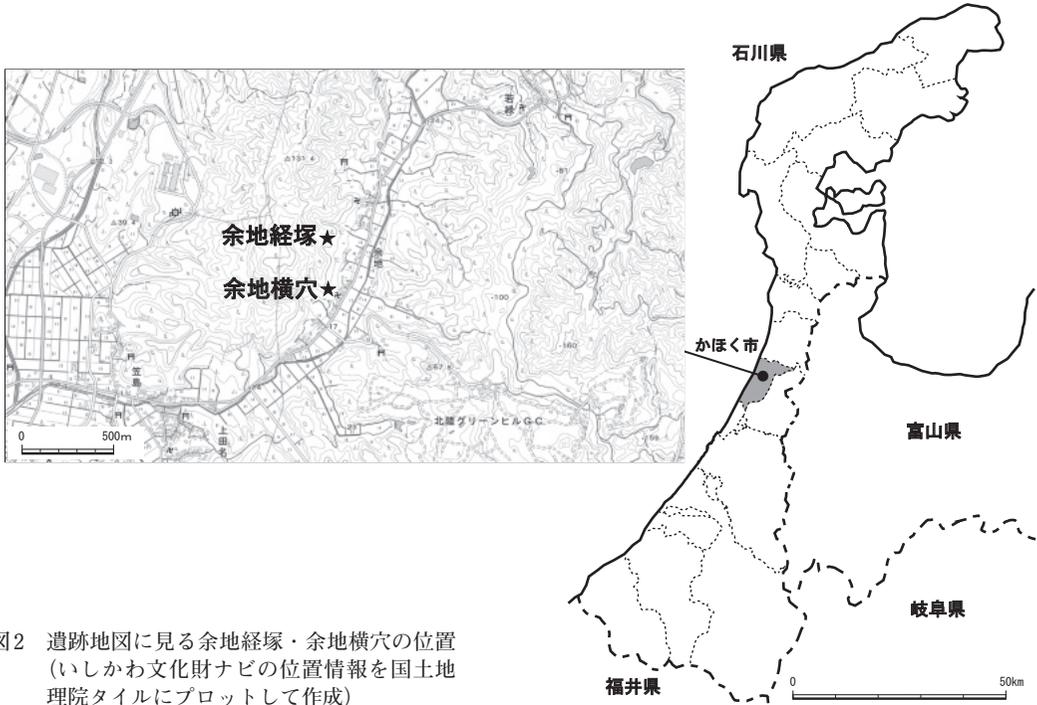


図2 遺跡地図に見る余地経塚・余地横穴の位置
(いしかわ文化財ナビの位置情報を国土地理院タイルにプロットして作成)



図3 古鏡塚から出土した鏡の図 (鳴門1901) ※甲は御館発見、乙丙丁戊が余地のもの

3. 余地経塚出土珠洲焼の詳細

続いて、資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼2点について、それぞれ詳しく見てみよう。

図4⁴⁾に示した余地経塚出土珠洲焼1（資料館の注記番号はKAKO50）は、中形の叩打壺（吉岡分類（吉岡1994）壺T種）で、経筒を入れた経筒をおさめる外容器として使用されていたものである。口径25.7～26.9cm、最大胴径36.8cm、高さ36.0cm、底径14.5～14.7cmをはかる。底部がすぼまった倒卵形の球胴に、コの字に屈折して立ち上がり弧状に外反する口頸が付き、口縁は平縁を呈する。体部外面には右下がりの叩き目が巡り（写真3）、内面には楕円形の押圧痕が残る（写真4）。吉岡編年I期（吉岡1994）のもので、平安時代末の12世紀後半に位置付けられる。内外面ともに色調は2.5Y4/1黄灰色を基本とし、胎土に砂粒・黒色粒子・海綿骨針を含む。

図5に示した余地経塚出土珠洲焼2（注記番号KAKO51）は、中形の片口鉢であり、経筒外容器の蓋として使用されていたものである。口径29.5～30.5cm、高さ12.0cm、底径10.7～10.9cmをはかる。腰高型で、器体が膨らみをもって開き、口縁が内湾気味で、端部はしっかり面を取る。内面は素文で卸し目がなく、外底面には静止糸切痕が鮮明に残る。1の壺同様、やはり吉岡編年I期、12世紀後半に位置付けられる。内外面ともに5Y6/1灰色を基本とし、胎土に砂粒・黒色粒子・海綿骨針を含む。なお、本資料の内面には、抽象的な刻文が1か所認められる（写真5）。窯場における製陶時のへら描きとして興味深い。

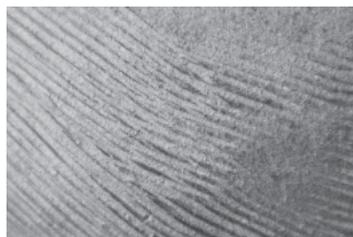


写真3 珠洲焼1の外面



写真4 珠洲焼1の内面



写真5 珠洲焼2の刻文

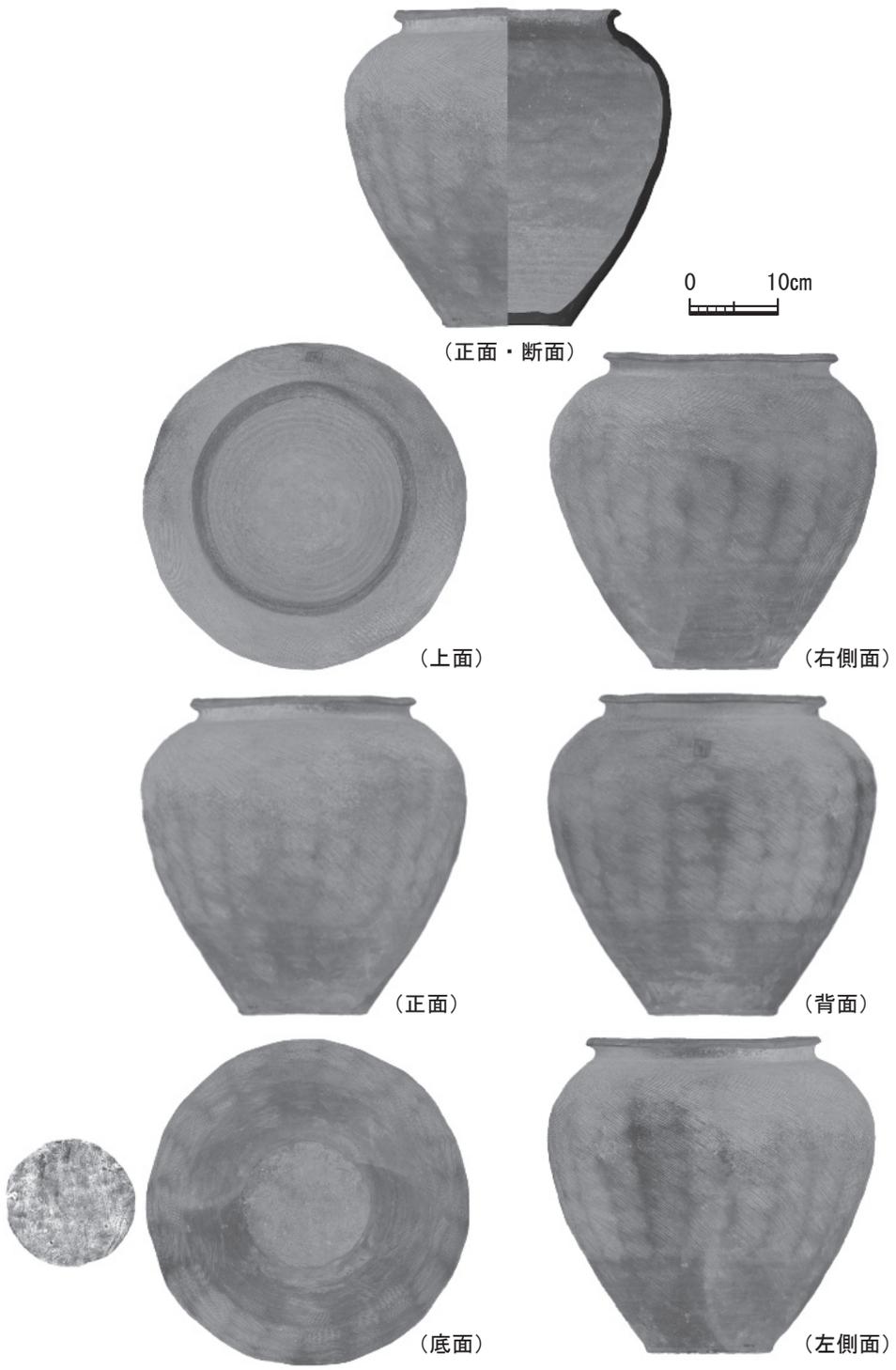


図4 資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼1の3D画像等

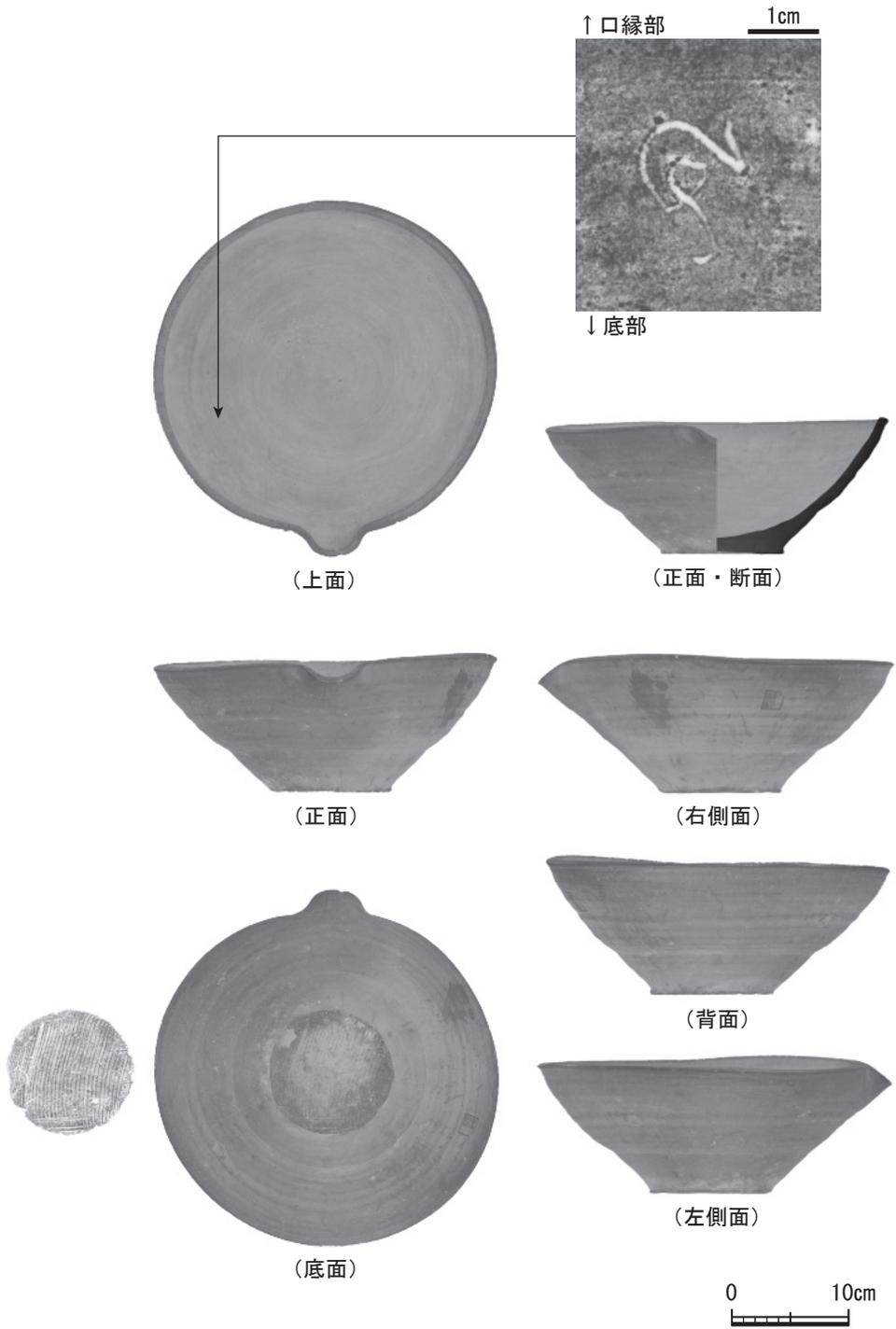


図5 資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼2の3D画像等

4. 余地経塚出土珠洲焼の評価

それでは、資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼2点の背景や詳細情報を踏まえて、当該資料を筆者なりに少し評価してみたい。

まず、2点とも、吉岡編年I期、12世紀後半の珠洲焼の完形資料であることが貴重である。初期の珠洲焼の2器種が完全な形で揃っており、北陸地方における古陶の良好な学術標本と言える。珠洲焼は、12世紀に珠洲の地で作られ始めた須恵器系陶器であるが、中世の日本海側地域において広く流通しており、北陸地方で中世遺跡を発掘すれば必ずと言っていいほどよく出土するものである。しかし、その多くは破片資料で、全形を目にする機会は限られている。それゆえ、余地経塚出土珠洲焼は、中世遺跡を発掘調査する際の参考資料として、大学での考古学教育や地域教育の教材として、きわめて価値が高いのである。近年、珠洲市を含む能登半島では大きな地震が毎年発生しており、悲しいことに本場の珠洲焼資料にも被害が及んでいる。現地での地震対策は進んでいるが、自然現象に完全に抗うことは難しい。そのため、珠洲から直線距離で100km以上離れた金沢の地であっても、同じ県内の財としてこれらの資料を守り続けることが、地方大学⁵⁾に属する博物館の使命の一つだと思う。

もう一つは、経塚からの出土品であることが重要である。余地経塚のマウンドも掘り崩され、相伴した鏡・剣も行方不明なのは残念であるが、珠洲焼の鉢を蓋として珠洲焼の壺に経筒を納めた当時の人々の信仰心がうかがわれる。経塚は、11世紀初め(1007(寛弘4)年)に藤原道長が奈良県金峯山に経典を埋納したことに端を発するとされるが(石田・矢島1937)、それが12世紀後半の石川県域にも確実に広がっていたことを示す物証である。『北陸人類学会志』(鳴門1901)の記載通りに7面もの和鏡と2本の剣が副納されていたとすると、末法思想の世の中で、余地経塚の築造者には強い想いがあったことがうかがわれる。このように、余地経塚出土珠洲焼の壺と鉢は、中世の精神文化資料としても意義がある遺物セットなのである。

加えて、北陸人類学会の収集品であることから、石川県の考古学の歩みに関する学史的資料としても大切である。北陸人類学会は、第四高等学校の教員であった須藤求馬氏が発起人総代となって1895(明治28)年に設立した地方学会で、考古学・人類学・民俗学などに関心を持つ会員たちが精力的に活動していた(松永2021)。須藤氏が1897(明治30)年に熊本県の第五高等学校に異動したこともあって、会は短期間で衰退・消滅してしまったが、その収集品は一世紀以上経った今も四高の後継校たる金沢大学に受け継がれているのである。現代の石川県では、石川考古学研究会(1948(昭和23)年発足)や金沢大学考古学研究室(1974(昭和49)年設立)などが地域の考古学を担っているが、それよりもはるか昔に考古学的活動に力を入れていた先人たちが存在したことを、余地経塚出土珠洲焼は静かに物語っている。

5. おわりに

以上、今回は金沢大学資料館所蔵考古資料のうち、かほく市余地経塚出土の珠洲焼2点について、深く情報を掘り下げてみた。数年前に、金沢大学古代文明・文化資源学研究所の小嶋芳孝先生、石川県立歴史博物館の野村将之氏から、この珠洲焼が金沢大学に存在する可能性を指摘され、個人的にずっと気になっていたのだが、整理・調査の過程で現物を確認できたので紹介した次第である。

筆者が資料館に勤めるようになって7年が経とうとしているが、いまだ把握できていない考古資

料が収蔵庫に眠っていることを痛感した。しかも、きわめて資料価値の高いものが長期間眠っていたのである。今後も収蔵庫を丁寧に見直しながら、考古資料に限らず各資料が持つ情報をできる限り引き出して、随時学内外に発信・公開していきたい。資料館所蔵資料について、何か情報をお持ちの方は、小さなことでもお知らせいただければ幸いである。

最後に、3D画像の作成にあたって、金沢大学古代文明・文化資源学研究所の小林正史先生からArtec Eva 3Dスキャナーをお借りした。ここに明記し、感謝申し上げる。なお、本稿は、JSPS科研費JP23H03880の成果の一部である。

註

- 1) 余地(与知)村は、1889(明治22)年に横山・谷・笠島・上田名・若緑とともに金津谷村となり、それが1907(明治40)年に高松村に編入されて、1922(大正11年)の町制施行により高松町字余地となった。その後、1950(昭和25)年に分村して横山・上田名・谷・笠島とともに金津村となり、1960(昭和35)年には宇ノ気町と合併して宇ノ気町字余地となっている(宇ノ気町史編纂委員会1991)。すなわち、資料館所蔵余地経塚出土珠洲焼が注記された頃は確かに高松町余地だったが、平成の大合併で2004(平成16)年にかほく市余地となる直前時点では、宇ノ気町余地だったのである。
- 2) 「いしかわ文化財ナビ」(<http://www.bunkazainavi.pref.ishikawa.lg.jp/>)
- 3) 「古鏡塚」(鳴門1901)には、「乙丙丁戊は余地の発見にて須藤求馬 北山重正君等所蔵せり」と記されている。資料館所蔵考古資料の中に宝達志水町北川尻出土埴輪など両氏に関係するものが存在することから(松永2022)、余地経塚から出土した鏡と剣が金沢大学構内に眠っている可能性はある。
- 4) 図4・5作成のために、余地経塚出土珠洲焼に対して三次元計測を実施した。計測にあたっては、筆者が所有するiPad Pro搭載のLiDARスキャナーと金沢大学古代文明・文化資源学研究所の小林正史先生が所有するArtec Eva 3Dスキャナーをそれぞれ使用した。図4・5の3D画像は、『金沢大学資料館紀要』第17号の拙稿(松永2022)同様、後者の計測データを3Dモデル用ソフトウェア「文化財ビューワー」の6面画像キャプチャー機能を使って画像保存したものである(今回の資料に対してはEvaの方が多く情報を取得できたため)。
- 5) 金沢大学は、令和5年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)」に採択されており、今後より一層、北陸地方の中核大学としての役割が求められていくだろう。

参考文献

- 在田則子 1996 「四高考古資料と北陸人類学会」『資料館だより』第7号、pp.10-11
石川県 1923 『石川県史蹟名勝調査報告』第1輯
石田茂作・矢島恭介 1937 『金峯山経塚遺物の研究』 帝室博物館
宇ノ気町史編纂委員会(斉藤晃吉ほか) 1991 『宇ノ気町史』第二輯別巻 集落誌 宇ノ気町役場
斎藤忠 1998 「経塚」『日本考古学用語辞典』 pp.118-119
鳴門漁長 1901 「古鏡塚」『北陸人類学会志』第4編、pp.29-30
松永篤知 2018 「金沢大学資料館所蔵考古資料の再整理」『金沢大学資料館紀要』第13号、pp.17-

- 松永篤知 2021 『金沢大学と石川県の考古学—北陸人類学会から現在までの歩み—』 金沢大学資料館・金沢大学埋蔵文化財調査センター・石川考古学研究会
- 松永篤知 2022 「金沢大学資料館所蔵考古資料に関する調査研究 2021 —3D スキャナーによる三次元計測を中心に—」 『金沢大学資料館紀要』 第17号、pp.37-57
- 吉岡康暢（監）1989 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館